名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察

庵　功雄

0. はじめに

名詞句にはいくつかの重要なステータスがあるが，その中でも重要なのが定性(definiteness) と情報の新旧である。

定性とは名詞句が「定 (definite)」であるか「不定 (indefinite)」であるかということである。本稿では Givón (1984) 等に従って，定，不定を次のように定義する。

(I) 発話時以前に名詞句の指示対象 (referent) が聞き手に同定されている（と話し手が想定する）場合，その名詞句は定であり，それが聞き手に同定されていない（と話し手が想定する）場合，その名詞句は不定である。

定性は英語などの多くのヨーロッパ言語では「冠詞」によってマークされなければならない統語範疇 (syntactic category) であるが，日本語ではそうではない。このことは次のような対比から明らかである (cf. Fukui (1995))[1]。

(1) a. 昨日，φ本を買った。
　　b. I bought a book / * φ book yesterday.

(2) a. 昨日，男に会った。φ男／その男は私の旧友である。
　　b. I met a man yesterday. The man / * φ man is one of my old friends.

まず，(1) b のような初出の普通名詞句は英語（等の定性が統語範疇である言語）では不定冠詞によってマークされなければならないが，(1) a からわかるように，日本語では限定詞を欠いても完全に文法的である。また，(2) b のように，テキスト内で2度目以降に言及され定になった名詞句は英語（等の定冠詞を持つ言語）では定冠詞によってマークされなければならないが，(2) a からわかるように日本語では必ずしも

そうではない[2]。

このように，日本語では定性は統語範疇ではないが，定性は名詞句にとって重要なステータスであり，日本語においてもそれは必ずしも恣意的に決定されているわけではない。

一方，新情報―旧情報の区別も名詞句のステータスを考える上で重要なものであるが，日本語では久野（1973）等で指摘されているように，「は」と「が」の選択等の問題でこの両者の区別が統語現象にも反映している。

このように，定性や情報の新旧は名詞句のステータスを考える上で（汎言語的に）重要な概念であるが，日本語ではこの点についての議論が必ずしも十分ではないところがあるように思われる。本稿では，ゼロ格名詞句の解釈という現象を通して，日本語におけるこれらのステータスの表され方の一端に迫ってみたいと思う。

1. 問題となる現象

次の例を考えていただきたい。

(3)　（外出先から帰った妻に対して夫が言う）

a. おかえり。お客さん ϕ 来てるよ。(cf. 大谷（1995))

b. おかえり。留守中にお客さん ϕ 来てるよ。

c. おかえり。？お客さん ϕ 留守中に来てるよ。

(4)　（たまたまあった友人に向かって）

a. 公園で男の子 ϕ 遊んでたよ。

b. ？男の子 ϕ 公園で遊んでたよ。

(5)　A：何か変わったことないかい。

B1：昨日例のセールスマン ϕ 来たんだ。(cf. 丹羽（1989))

B2：？例のセールスマン ϕ 昨日来たんだ。

(3) の a～c は類似した文だが，第一発話としての許容度には差がある。即ち，a 文と b 文は夫の第一発話として問題ないが，c 文はその文脈では不適格である。(4) でも同様に，「第一発話としては」b 文は適格性が落ちる。(5) でも B2 文の許容度は低い[3]。こうした現象について本稿では語順と名詞句のステータスという観点から考えていきたい。

2. 先行研究

本稿で問題とする現象については丹羽（1989）がかなり綿密な議論を行っている。丹羽（1989）は助詞を欠く名詞句を一律に「助詞の省略」と考えるのではなく，その一部は「無助詞格」の名詞句と考えるべきであるとする。その上で，無助詞格と主題性の関係について次のように述べている。

(6) 「名詞 ϕ」は，文頭に近い位置にあるほど主題性が高く，文中深い位置にあるほど主題性が低い。（丹羽（1989：41））

(7) 「名詞 ϕ」が文頭にあって主題性が高い場合は，格関係の制限はない。それに対し，「名詞 ϕ」が文中深い位置にあり主題性が低い場合は，「が」格，「を」格，及び「に」格の一部，「へ」格に限られる。（丹羽（1989：42））

(6)（7）を丹羽（1989）の例に基づいて考えてみよう（例文の文法性判断は丹羽（1989）による）。まず，(8) のようにガ格，ヲ格，ヘ格と二格の一部では文頭以外の位置でも無助詞格（ゼロ格）が許容されるのに対し，それ以外の格では文頭以外の位置ではゼロ格は許容されない[4]。

(8) a. ここ，つくし ϕ／が多いんだ。
　　b. あいつ，車 ϕ／を買ったぞ。
　　c. うちの息子もやっと大学 ϕ／に入ったよ。
　　d. あんた，あっち ϕ／へ行ってよ。

(9) a. 山田君がきのうあの子＊ ϕ／に電話してたよ。
　　b. あの子 ϕ／にきのう山田君が電話してたよ。

(10) a. 太郎がよくこのコート＊ ϕ／で練習してたよ。
　　b. このコート ϕ／で太郎がよく練習してたよ。

(11) a. 桃太郎って，この桃＊ ϕ／から生まれたんだよ。
　　b. この桃 ϕ／から桃太郎が生まれたんだよ。

丹羽（1989）はさらに，名詞句の「既知性」という概念を導入し，既知性と語順の関係について次のように述べている。

(12) 既知性の高い名詞の場合は，語順の影響が小さく，既知性の低い名詞の場合は，語順の影響を受けやすく，文頭に近い位置では適格性が低い。（丹羽（1989：45））

3. 名詞句の活性化度

3—1. 丹羽（1989）の問題点

前節では先行研究として丹羽（1989）を紹介した。丹羽（1989）の議論は問題の本質をかなり的確に捉えていると言える。まず，助詞を伴わない名詞句の一部をそれ独自のステータスを持った「無助詞格名詞句（以下，「ゼロ」と略称する）」として位置づけ，ゼロが許容されるか否かに「文頭」か否かという語順の問題が密接に関連しているとする点には論者も基本的に賛成する。その理由は，文頭のゼロが許容されるのは基本的には文頭の「主題性」の高さによるものであるが，「主題」[5]を考える上で「文頭」という位置の問題は外して考えられないからである。次例を考えていただきたい。

(13)　a. 太郎が花子を殺した。
　　b. ＊太郎が花子は殺した。
　　c. 花子は太郎が殺した。

(14)　a. The boy killed Mary.
　　b. John killed the boy.

もし「は」が「主題」を表す真正のマーカーであるとすれば，(13) b は (13) a の「花子」が主題化したものとして存在し得るはずである。実際，「定」が統語範疇である英語では，(14) a，b からわかるように，「定冠詞でマークされる」ことが「定」であるために必要な要件であり，それ以外の要件（文頭に位置すること等）は必要とされない。しかし，日本語では (13) b は非文法的であり，(13) a の「花子」が主題化した文は (13) c でなければならない。これは「主題」が「は」という形態論上のマーカーによってのみ表されるのではないということ，及び，「主題」における「文頭」の重要性を示している。以上のような点からも，ゼロの適格性と文頭位置の間に関連性があるという丹羽（1989）の議論は妥当なものであると言える[6]。

しかし，丹羽（1989）の議論に全面的に従うことはできない。

丹羽（1989）の議論の問題点は適格性の判断を文脈を抜きに行っている点にある。例えば，丹羽（1989）は (15) a，b には適格性の差があり，後者の許容度は前者より落ちるが，(16)[7] では a，b の間に許容度の差はないとし，その理由は，現場で新たに発見されたものである「バス」は既知性が低いのに対し，コンピューター好き同士の会話では「新型のパソコン」のことを話題にするのは普通で「新型のパソコン」の既

知性が高いためであるとしている。

(15)　a. おい，向こうからバス φ 来るぞ。

b. ？おい，バス φ 向こうから来るぞ。

(16)　(コンピュータ好き同士で)

a. 来月新型のパソコン φ 出るんだって。

b. 新型のパソコン φ 来月出るんだって。

しかし，論者はこの議論には問題があるように思われる。次例を考えていただきたい。

(17)　(登山の帰り)

A：疲れたなぁ，何とかならないかなぁ。

B1：おい，喜べ。向こうからバス φ 来るぞ

B2：おい，喜べ。？？バス φ 向こうから来るぞ。

(18)　A：バス，遅いなぁ。

B1：そうだなぁ…。おい，見ろ。？向こうからバス φ 来るぞ。

B2：そうだなぁ…。おい，見ろ。バス φ 向こうから来るぞ。

(19)　A：何か，新しいニュースはあるかい。

B1：うん。来月新型のパソコン φ 出るんだって。

B2：うん。？新型のパソコン φ 来月出るんだって。

(20)　A：新型のパソコンの出荷，遅れてるね。

B1：うん。でも，？？来月新型のパソコン φ 出る（ことになった）んだって。

B2：うん。でも，新型のパソコン φ 来月出る（ことになった）んだって。

(17) (18) の B1 文は (15) の a 文に，B2 文は (15) の b 文に，(19) (20) の B1 文は (16) の a 文に，B2 文は (16) の b 文に各々対応するが，その許容度は相補分布をなしている。即ち，(17) (19) のような文脈では (15) (16) の a 文のようなゼロが文頭にない文は許容されるが，(15) (16) の b 文のようなゼロが文頭にある文は許容されないのに対し，(18) (20) のような文脈では分布がその逆になるということである。

さらに，丹羽 (1989) は文脈指示の名詞句の場合も語順による適格性の違いはなくなるとし，次の (21) (22) の a，b の間に適格性の差はないとしている。

(21)　a. おい，経理課にあの子 φ 入ったぞ。

b. おい，あの子 φ 経理課に入ったぞ。

(22)　a. きのう例のセールスマン φ 来たみたいだよ。

b. 例のセールスマン ϕ きのう来たみたいだよ。

しかし，この場合も（15）（16）と同様の現象が観察される。

(23) A：最近，何かニュースはあるかい？

B1：ああ。経理課にあの子 ϕ 入ったよ。

B2：ああ。？あの子 ϕ 経理課に入ったよ。

(24) A：ねえ，この間面接に来た子どうなった。

B1：？？経理課にあの子 ϕ 入ったよ。

B2：あの子 ϕ 経理課に入ったよ。

(25) A：最近，山田のことで何かニュースはあるかい。

B1：ああ。きのう例のセールスマン ϕ 来たみたいだよ。

B2：ああ。？例のセールスマン ϕ きのう来たみたいだよ。

(26) A：山田のところへ来てた例のセールスマンどうした？

B1：？きのう例のセールスマン ϕ 来たみたいだよ。

B2：例のセールスマン ϕ きのう来たみたいだよ。

即ち，この場合にも（23）（25）のように特定の名詞句（またはイベント）が話題（topic）になっていない場合には（21）a（＝（23）B1）（22）a（＝（25）B1）が適格で（21）b（＝（23）B2）（22）b（＝（25）B2）は不適格であるのに対し，（24）（26）のように「あの子」「セールスマン」が話題になっている場合には適格性の分布がその逆になるのである。

これらの判断（これについては複数のインフォーマントの賛同を得ているが）が正しいとすれば，丹羽（1989）の議論は修正を要することになる。なぜなら，丹羽（1989）の議論からは（15）a や（16）a，b が不適格になったり，（15）b が適格になること，及び，（21）a，b，（22）a，b の間に許容度の差があること等は予測されないからである。

3—2. 名詞句の活性化度

3—1 では丹羽（1989）の議論の問題点について指摘した。丹羽（1989）の議論の問題点は次のように整理できる。

(27) a. ゼロの許容度を文脈抜きで決めることはできない。

b. ゼロの許容度に既知性の高低は（少なくとも一義的には）関与しない。

では，上述の現象はどのように考えればよいのだろうか。論者は，この現象に一義的に関与するのは丹羽（1989）の言う「既知性」ではなく，Prince（1981）が言うよ

うな，名詞句が活性化されている（evoked）か否かの違い（「活性化度（evokedness）」）であると考える。

Prince（1981）は旧（given）—新（new）に関するそれまでの議論を整理し，それまでの二分法に変えて次のような親和性の階層（familiarity scale）を提案している[8]。

(28)　新品（brand-new）〈関連づけられた新品（brand-new anchored）
〈要素内包型の推論可能（containing inferable）〈推論可能（inferable）
〈未使用（unused）〈既活性（evoked）（Prince（1981：245））

このスケールの各要素を簡単に説明する。まず，「新品」は "a person" のような初出の普通名詞句に，「未使用」は固有名詞のような初出の定名詞句に相当する。初出の普通名詞句を聞いた場合，聞き手はその指示対象（referent）を新たに作り出さなければならないが，初出の定名詞句の場合には聞き手は予めデータベースの中に登録されている要素を取り出してくるだけでよい。これが「新品」と「未使用」の違いである。また，「既活性」には，テキスト内で繰り返されることにより聞き手の意識の中で活性化された「テキスト的既活性（textually evoked）」と，1，2人称代名詞や発話の場に存在する要素のように発話状況内で活性化されている「状況的既活性（situationally evoked）」の二種類があるが，いずれの場合も聞き手にとって指示対象は顕著（salient）である。

一方，「関連づけられた新品」は "a person that works at Penn" のような初出の普通名詞に修飾成分がついたものであり，「推論可能」は "my neighbor" のように既活性のものとの関連で指示対象が想定できるものを言い，「内包型の推論可能」は推論可能な名詞句が修飾成分を伴う場合である。これらについて詳しくは Prince（1981）を参照していただきたい。

(28) のスケールの右の要素の方は左の要素よりも旧性（givenness）が高い。このスケールが意味しているのは，ある対象を指示するときに，話し手は聞き手が知っていると想定できる限りでできるだけスケールの高い位置にある方法を用いなければならないということである。例えば，Jake という人物がタクシーの運転手（driver）をしていることを聞き手も知っていると想定できる場合には，話し手は the driver（推論可能）ではなく，（それより旧性が高い）Jake という語（未使用）を使わなければならない。もしそうしなかった場合は，the driver は Jake 以外の人物を指すと解釈されるか，それが意図的であることが聞き手にわかった場合には話し手が何か情報を隠していると解釈されることになるのである（Prince（1981：245ff.））。

このPrince (1981) のスケールを使うと，3—1で観察した現象は次のように整理できる。なお，ここでは「新品」と「未使用」を「既活性」と対立させて「未活性」と呼ぶ。

(29)　文頭のゼロは既活性と解釈され，非文頭のゼロは未活性と解釈される[9]。

つまり，文頭のゼロは聞き手にとって，「その談話において」顕著であるものでなければならないため，第一発話では使えないが，文脈内で当該の要素が（話題あるいは話題に関連するものとして）活性化されていれば使うことができる。一方，非文頭のゼロは未活性の要素と解釈されるため，第一発話では問題がないが，その要素が談話内で活性化されているときには使えなくなるのである。

ここで言う「既活性—未活性」の対立と丹羽（1989）の「既知性」という概念の違いは次のような点にある。

まず，「既知性」は聞き手が指示対象を同定しやすいか否かに関わるものである（この意味で，既知性という概念は「定になりやすい度合い」と考えることができるものと思われる）。例えば，現場指示の名詞句は既知性が高い[10]。この場合，当該の名詞句がその談話で話題／主題になっているか否かは既知性の高さとは独立の問題である。例えば，(21) の「あの」や (22) の「例の」は聞き手が指示対象を同定できることを前提に使われるものであるから既知性は高いが，それだけでは，当該の要素が話し手（及び聞き手）の知識データベースに登録されているということだけであるので「既活性」にはならない。既活性にするにはその名詞句をテキスト内に導入するか，その名詞句がテキスト内で話題（の一部）となっていることが必要である。丹羽（1989）は「既知性の高さ」だけで十分であるとしているが，3—1で見たように，「既知性の高さ」だけでは現象の記述には不十分である。

3—3. 既知性と文脈の有標性

3—2ではPrince（1981）の親和性の階層の中の概念を使うことで3—1で見た現象について包括的な説明が与えられることを見た。このように，文脈ではなく対象の「既知性」の高さがゼロの許容度に関与的であるとする丹羽（1989）の議論には問題があると考えられるが，これは「既知性」が全く関連がないということではない。

論者は，「既知性」が関与するのはゼロの許容度ではなく，想定される文脈の有標性であると考える。即ち，対象の既知性（「なじみ度」と言ってもよい）が高い場合はそれが活性化されている文脈（e.g. (20) (24) (26)）が想定しやすいのに対し，既知性が低い場合はそうした文脈が想定しにくいということであると考えるのである。また，

既活性の名詞句は常に定だが，普通名詞句は初出では基本的に不定である。普通名詞句である「バス」が定となっている (15) b が許容される文脈が想定しにくいことにはこのことも関与していると考えられる。これに対し，(21) (22) では当該の名詞句(「あの子」「例のセールスマン」) は定であるため，それが活性化されている文脈が想定されやすいと言える。

このように，「既知性」はゼロ名詞句の解釈に関与しているが，その関わり方はあくまで副次的なものである。なぜなら，いくら (18) のような文脈が (17) のようなものより想定しにくいとしても，(18) の文脈では (15) b が適格で (15) a の適格性は (15) b より劣るわけであるから現象の記述において一義的に関与的なのは，名詞句がテキスト的あるいは状況的に活性化されているか否かであると言える。

3—4. 助詞を伴う場合との違い

ここまでは名詞句が助詞を伴わない，ゼロの場合について考えてきた。では，明示的に「が」などの助詞を伴う場合はどうであろうか。次例を考えていただきたい。

(30)　(登山の帰り)

A：疲れたなぁ，何とかならないかなぁ。

B1：おい，喜べ。向こうからバスが来るぞ

B2：おい，喜べ。バスが向こうから来るぞ。(cf. (17))

(31)　A：何か，新しいニュースはあるかい。

B1：うん。来月新型のパソコンが出るんだって。

B2：新型のパソコンが来月出るんだって。(cf. (19))

(32)　A：最近，何かニュースはあるかい？

B1：ああ。経理課にあの子が入ったよ。

B2：ああ。あの子が経理課に入ったよ。(cf. (23))

(33)　A：最近，山田のことで何かニュースはあるかい。

B1：ああ。きのう例のセールスマンが来たみたいだよ。

B2：ああ。(？) 例のセールスマンがきのう来たみたいだよ。(cf. (25))

(34)　A：バス，遅いなぁ。

B1：そうだなぁ …。おい，見ろ。？？向こうからバスが来るぞ。

B2：そうだなぁ …。おい，見ろ。？バスが向こうから来るぞ。(cf. (18))

(35)　A：新型のパソコン，出るの遅れてるね。

B1：うん。でも，#来月新型のパソコンが出る（ことになった）んだって。

B2：うん。でも，#新型のパソコンが来月出る（ことになった）んだって。

(36)　A：ねえ，この間面接に来た子どうなった。　(cf. (20))

B1：#経理課にあの子が入ったよ。

B2：#あの子が経理課に入ったよ。(cf. (24))

(37)　A：山田のところへ来てた例のセールスマンどうした？

B1：#きのう例のセールスマンが来たみたいだよ。

B2：#例のセールスマンがきのう来たみたいだよ。(cf. (26))

(30)—(37) は前述の (17)—(20) (23)—(26) の中の（　）内で指摘したものに各々対応するが，ゼロと「が」では許容度が異なる場合がある。即ち，(30)—(33) のような第一発話の文脈では「が」は語順の違いに関わらず許容されるが，(34)—(37) のように当該名詞句がトピックになっている文脈では「が」は語順の違いに関わらず許容されない。これは，前者の場合，当該の名詞句（「バス」「新型のパソコン」「あの子」「例のセールスマン」）は当該文脈において初出（従って当該文脈において未活性）であり，かつ，（ゼロとは異なり）「が」はその要素が未活性であることを明示的にマークするものである[11]ので，語順の影響を受けないと考えられるためである。一方，後者の場合は，当該文脈で当該名詞句は既活性であるため，未活性の要素をマークする「が」は使えないのだと考えられる。ここで重要なのは，ゼロの場合には語順が影響を与えるが，助詞「が」があるときには語順の影響はなくなるということ，つまり，「ゼロ」には（「が」とは異なり）当該要素が未活性であるということを単独でマークする機能はなく，あくまで語順との組み合わせの中でそれを示すことができるに過ぎないということである。

4. まとめ

本稿では，ゼロ格名詞句（ゼロ）の解釈とそのステータスの関係という問題を考えた。その結果，次のことが明らかになった。

(II)　a. ゼロの許容度を文脈抜きで決めることはできない。

b. ゼロの許容度に既知性の高低は（少なくとも一義的には）関与しない。

c. ゼロが文脈内で既活性の時はゼロは文頭に位置するのに対し，ゼロが未活性の時はゼロは文頭以外に位置する。

d.「名詞句＋が」はゼロとは異なり，文頭位置でも未活性と解釈される。

本稿の内容は丹羽（1989）に多くを負うものであるが，それを Prince（1981）の指摘している，名詞句のステータスを扱う上でのより一般的な枠組みの中で捉え直すことを目指した。本稿の初めで述べたように，日本語では名詞句のステータスの研究はあまり進んでいないと言える。本稿で取り上げた現象が日本語における当該分野の研究に少しでも資するところがあれば幸いである。

注

1. 以下，ϕ はそこに要素が存在しないことを，＊はその文が非文法的な文であることを，#はその文が当該の文脈では不適格であることを，？，？？は文法的または文脈的な理由によりその文の許容度が低いことを各々表す。
2. なお，このようにテキスト内で定になった名詞句（庵（1997a）の用語で言う「定情報名詞句」）をゼロでマークすることは常に可能であるわけではない。これについて詳しくは庵（1997b）を参照されたい。
3. ただし，これは，（(9) a～(11) a でゼロを使った場合のように）これらの文の「文法性」が低いということではない。後述するように，これらの適格性が高い文脈も存在する。
4. ただし，私見では（11）b のゼロは許容度が低い。（ア）のゼロも同様である。これは，(9)'（10)' と比較した（11)'a，（ア)' の許容度の低さによるものであるように思われる。
   （ア）　大阪？？ϕ／から新しい先生が来るんだって。
   (9)'（？）あの子は昨日山田君が電話してたよ。
   (10)'　このコートは太郎がよく練習してたよ。
   (11)'　？この桃は桃太郎が生まれたんだよ。(cf. この桃からは桃太郎が生まれたんだよ)
   （ア)'　？？大阪は新しい先生が来るんだって。
5. ここでいう「主題」は「は」でマークされているといった形態論的ものであるというよりも Halliday（1985）の言う theme に近いものである。
6. 日本語における語順の問題を考える上での優れた論考が野田（1983）に見られる。
7. なお，（16）では原文の「今度」を「来月」に改めた。
8. 類似の提案は Gundel et al.（1989）や Chafe（1994）でもなされている。
9. 二つ以上の名詞句がある場合には（29）が成り立つが，名詞句が一つの場合は文頭のゼロも未活性と解釈され得るようである（cf.（3）a，（イ））。
   （イ）　鳥 ϕ，鳴いてるね。
   これは，名詞句が１つの場合のゼロは選択の余地なく文頭に位置させられるが，名詞句が複数ある場合には，その名詞句を文頭に置くか否かに選択の余地があり，文頭のゼロは「選択の上で」その位置に置かれているため，「既活性」と解釈されるものと思われる。
10. ただし，現場指示の名詞句のステータスについては次のような問題点がある。
   （ウ）　a. あの時計 ϕ，止まってる。
   　　b. あの時計が止まってる。
   （ウ）a，b を比較すると，「あの時計」は a では現場指示と解釈されるのに対し，b では

話し手の観念の中にある時計を指す観念指示と解釈される。こうした現象に関する詳しい議論については別項に譲りたい。

11. 久野（1973）が「が」について述べている「中立叙述」「総記」のいずれの場合においても，「が」でマークされた名詞句はその談話において初出であり，聞き手にとって未活性な要素（「新」または「未使用」）である。

参考文献

庵　功雄（1997a）「「は」と「が」の選択に関わる一要因」『国語学』188

――――（1997b）「日本語のテキストの結束性の研究」未公刊博士論文，大阪大学

大谷博美（1995a）「ハとガと ϕ」宮島達夫・仁田義雄編。『日本語の類義表現の文法（上）』くろしお出版

金水　敏（1986）「連体修飾成分の機能」松村明教授古稀記念会編『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院

久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

郡　博子（1992）「日本語の語順を決める二つの要因」『日本語・日本文化』18，大阪外国語大学

田窪行則（1990）「対話における知識管理について」崎山理・佐藤昭裕編『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂

永井麻生子（1997）「叙述内容の関係と「は」と「が」の選択に関する一考察」『平成十年度国語学会発表要旨集』国語学会

丹羽哲也（1989）「無助詞格の機能」『国語国文』58-10，京都大学

野田尚史（1983）「日本語とスペイン語の語順」『大阪外国語大学学報　言語編』62，大阪外国語大学

――――（1996）『新日本語文法選書 1「は」と「が」』くろしお出版

Chafe, W. (1994) *Discourse, consciousness, and time*. The University of Chicago Press

Fukui, N. (1995) *Theory of projection in syntax*. Kurosio publishers

Givón, T. (1984) *Syntax I*. John Benjamins Publishing Company

Gundel, J., Hedberg, N. & Zacharski, R. (1989) "Giveness, implicature and demonstrative expressions in English discourse," *CLS* 25

Halliday, M. A. K. (1985) *An introduction to functional grammar*. Edward Arnold

Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. Longman

Prince, E. (1981) "Towards a taxonomy of given-new information," Cole, P. (ed.) *Radical pragmatics*. Academic Press